

「米国の大統領選挙」

2020年11月09日

米国の大統領選挙は混迷を深めたが、バイデン氏が勝利したと、メディアは一斉に伝えた。バイデン氏は「分断をいやしていく」と堂々たる勝利宣言をし、各国の首脳たちはお祝いのメッセージを送っている。米国大統領は、世界に大きな影響を与えるので、日本の新聞、テレビも総力を上げて報道をした。私も興味深く見続けた。

4年前の共和党の予備選挙では、トランプ氏は泡沫候補と言われていたが、予備選を制し、大統領選挙では、あれよ、あれよという間に、大統領に選ばれた。既成の政治家たちの論理と言葉に辟易した国民は、自分たちに通じる言葉で語るトランプ氏に期待をかけたのであろう。トランプ氏は政治の経験はなく、ビジネスマンとして成功し、全てを損得で考える人であった。「米国第一主義」を口ぐせのように語ったが、国を担う政治家は皆、「米国第一主義」の政策を取るのは当たり前である。しかし、トランプ氏は気に入らないニュースを「フェイクニュース」と言ってメディアと対立し、気に沿わない人々を自分の周りから遠ざけ、独りよがりになっていった。経済最優先政策を取り、国際協調をないがしろにした。温暖化阻止が現代世界の緊急の課題であると、国際間で「パリ条約」を結んだが、トランプ氏は、温暖化は科学的根拠がないと「パリ条約」から離脱した。それだけではなく、イラン核合意、世界保健機関など、諸々の国際条約に背を向け、自国の主張と経済優先政策を押し進めた。「コロナ問題」に象徴されるように、科学的・医療的知見を無視し、とんでもない無知な発言をしていた。ベトナム戦争は5万人を超える戦死者を出し、厭戦気分が広がり、ベトナム戦争の無意味さを浮き彫りにしたが、コロナでの死者は、ベトナム戦争の4倍を超えている。それでも、コロナは恐怖ではないと豪語し、マスク着用も拒否していた。黒人・女性差別問題でも、人権無視の発言を繰り返していた。とても、大統領としての知性や資格はないように見えた。米国人は、西部劇の主人公のようなマッチョな男が好きなのだと思われた。トランプ氏を支持する熱狂的な人々が多く、強固な岩盤支持層がある。今回の大統領選挙でも、アイオワ州やフロリダ州などの重要州で勝ち進み、序盤は優位に展開していた。選挙に勝つことへの執念は物凄く、トランプ陣営の選挙運動は熱気に溢れていた。終盤、郵便投票が開くと共に、勢いは沈静化し、米国の良識が反トランプへと舵を切ったようだ。ところが、トランプ氏は、選挙結果に納得せず、「郵便投票を開票するな」と、投票権を無視するように訴えた。更に裁判で、不正な選挙を暴くと言っているが、その根拠は乏しい。民主主義の根幹である国民の投票行動に服さざるを得ないであろう。我儘なわんぱく坊主が駄々をこねているようだ。大統領職を追われたら、債務の取り立てと刑事訴追を受ける可能性があるからだという報道もある。そんなことで、大統領の椅子に執着するなら、正義を愛するマッチョとは言えない。

トランプ氏の発言は見苦しかった。米国への以前のような敬意は薄れ、影響力は落ち、世界はただの国と見なすだろう。しかし、「コロナ禍」の中、66.4%の高い投票率で、バイデン氏は、史上最高の投票数を集めたという。選挙のあり方は、日本人から見ると、理解しがたいことが多いが、国民一人ひとりがあれだけの熱意をもって、声を上げる姿に、草の根の強力な民主主義を見せられた。日本人は政治を、もっと身近に受け止め、責任的に関わることが大切ではないかと思われた。米国の対立・分断は根深く、修正は大変であろうと想像するが、多様な人種、移民からなる米国の文化であるからこそ、21世紀をリードする共生の価値観を生み出し、世界に貢献する国になってほしいものである。